

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | <特集2 歴史認識再考2>志賀賢治 広島平和記念資料館館長に聞く「『あの日』をいかに伝えるか」                                   |
| Author(s)   |   |
| Citation    | 公共空間 (2013), 2013 Autumn: 19-21   |
| Issue Date  | 2013  |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/2433/184880">http://hdl.handle.net/2433/184880</a> |
| Right       |   |
| Type        | Article   |
| Textversion | publisher   |

## 【歴史認識再考②】

志賀賢治 広島平和記念資料館館長に聞く

「あの日」をいかに伝えるか

自民党教育再生実行本部において歴史教育の見直しが進められ、第二次世界大戦前後の歴史認識を中心に、日本の歴史教育は変革の時を迎えている。戦争を体験した世代が減少している今、当時の様子を後世に伝えることの意義は一層増している。先の大戦をいかに伝えていくか。この難しい問題について、開館以来戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えてきた広島平和記念資料館<sup>1</sup>の館長、志賀賢治氏にお話を伺った。

## 平和記念資料の紹介を簡単にお願います。

「当館は博物館学では歴史博物館という分類にはなりますが、戦争の歴史全体を語っているわけではありません。当館の目的は、原爆被害の実相をあらゆる人に伝え、核兵器廃絶と平和の実現に寄与することであり、その一点につきま

す。私は『八月六日に何が起きたのかを伝える館』であるという風に表現しています。当館はそのために、資料の収集と展示を行っています。もう一つは、平和教育に取り組んでいます。例えば、被爆者に、修学旅行生の前で被爆体験

を語ってもらったり、ワークシートを用意して平和の大切さを学んでもらったりしています。課題は山積みですが、平和のためにそういった活動を行っております。」

## どのような課題がありますか。

「最大の課題は、被爆体験者の『語り』をいかに後世に繋いでいくかということです。敗戦からもう七十年近く経ち、被爆者も少なくなっています。この課題を直接的に解決することは困難です。本人以外がなかなか語り継げるような体験ではないですから。だから我々は、それを想像するための手がかりとなる資料の収集を強化するしかありません。例えば、八月六日に市内の様子を撮影した写真があまりに少ないので、



作/青木尊美 (広島平和記念資料館所蔵)

被爆者に  
当日の絵  
を描いて  
送っても  
らうとい  
う取り組  
みを行い  
ました。  
防火水槽  
に頭を突  
っ込んで

死んでゆく被爆者の有名な絵は、その時送られてきたものです。もう一つの課題は、当館に来館されない方に対してのアプローチです。そのような方に、核兵器の実態を知ってもらうためには、県内外・海外への発信や、平和教育が大切になります。厳しい財政制約の中、毎年いくつかの都市で出張展覧会をやっています。国外では、クロアチアのザグレブ市などで行ったことがあります。

平和教育に関しては、広島に限ってですが、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館のボランティアの方が出張で体験記の朗読などを行っています。被爆者が少なくなる中で、被爆体験を、臨場感を持って伝えることができる朗読という手段は今後とても重要になってきます。インターネットを使って海外の学生に向けての被爆証言の発信もやっています。広島基町高校では、被爆者の証言を聞いてそれを元に生徒が八月六日の絵を描くという取り組みをやりました。相当詳しく話を聞かないと絵は描けませんから、絵を描く過程で被爆体験はかなり色濃く生徒に伝えられたと聞いています。ただ、そういった取り組みを義務教育のカリキュラムに組み込むようなことは今のところ難しいと思います。しかし、今は広島だけの取り組みも、将来的に県外の学校に広まって欲しいです。



広島平和記念資料館 館長室において。

平和記念資料館には、原爆被害の伝承を通して戦争の悲惨さを伝えるという役割もあると思います。東館<sup>2</sup>には戦争の歴史を伝える資料が展示されていますが、時として平和記念資料館は、東アジアなどの方に「被害者意識に基づいた展示」を行っているともあるようです。

「まず、トリップアドバイザー<sup>3</sup>には、『バランスのとれた展示をしている』という評価を頂いています。有り難いことですが、ただし、それは欧米人から見てバランスがとれているという意味であるという自覚はあります。中国・韓国人からの評価はどうかという点は、確かに少し

振り返る必要があるかもしれません。

東館では、明治に入ってから第二次大戦敗戦までの広島市の歴史を紹介しています。南京事件に触れたパネルもあります。一九九四年に東館が新たにオープンしたときに、現在のような構成になりました。当時は社会的に加害の歴史が見直されていた時期であり、政権的にもリベラルな内閣の時期であり、広島でも、もつと加害の歴史を書くべきであるとの声も強く出されていました。東館の展示を見た東アジアの方は、

『広島は軍都であり、侵略の拠点であったから、原爆を落とされたのだ』という感想を抱くことが多いようです。日本が起こした侵略戦争の終わりに原爆が投下されたことは事実ですが、『だから、広島への原爆投下は当然だった』と受け止められるのは本意ではありません<sup>4</sup>。本館の展示が示すように、原爆は非人道的な兵器なのです。それにアメリカにとっても原爆投下は、戦争の早期終結のみを目的としたものではなく、原爆を使用しない選択肢もありました。ですから、これら二つの出来事は分けて考えていただきたいところです。歴史の展示があるからアジアの方でもこの館に足を運んでくれるという面は否定できませんが、原爆被害の実相を伝えることと歴史の展示をどのように併せて触れるかという点は、いつも悩ましさを感じています。」

逆に、右翼団体からも批判の対象になることがありますか。

「直接的に当館が批判されることはないですが、確かに原爆犠牲者慰霊碑の『安らかに眠りください、過ちは繰り返しませんから』という碑文が削られる事件がありましたし、『過ちは繰り返しませんから』の主語は誰なのかということ、長い間、論争的になっています。」

主語は誰のですか。

「広島市の公式見解は『人類』です。僕も立場上、人類としか言いようがありません。ただ、人によっては、その主語は日本である場合もあるでしょうし、局面によってはアメリカというように理解する人もあるでしょう。」

しかし、現実を振り返ったとき、核兵器保有国は増加し、保有しようとしている国も増えていきます。また、日本自身もアメリカの核の傘に守られているわけですが。

「非常に答えにくい質問ですね。直接的な回答はできませんが、アジアの方に『原爆で死んだのは日本人だけではない』と説明した時に、意外がられたことがありました。多くの外国人が被爆して亡くなりました。申し上げたいのは、

核兵器は人種・国籍を問わず老いも若きも殺しつくすものであるということです。核兵器は人類共通の敵であるというのが私の回答です。」

**話は変わりますが、被爆人形の撤去が話題になっています。これはどういう意図なのでしょう。**

「博物館は実物が存在して成り立つものですから、実物にこだわるのは当然のことです。人形等は、補助資料に過ぎません。日本人の場合、例えば絵画展で、最初に説明書きを一生懸命五分六分と読んで、それから展示を三十秒も見ないで次に行っちゃうなんて光景を良く見ます。オーダーに言えば、これでは、説明書きはむしろ逆効果になっています。」

被爆人形の撤去には、もつと別の意味も込めています。多くの来館者は、本館に入って最初に目に飛び込んでくる被爆人形のことを良く覚えていきます。しかし、数年経つと被爆人形しか覚えていないなんて人もおられます。人形はあくまで模型ですから実際の被害を正確に伝えているとはいえません。あの人形は、服を着ていますし、腕の皮膚はただれているのに、顔は綺麗なままです。不自然に感じませんか。実際は、顔にも火傷を負っていますし、服も燃えています。今は、生存する被爆者が『実際はあんなもんじゃなかった』と言ってくれるから良いのですが、

もう十年も経てば、あの人形の姿がそのまま被害の実態として伝わってしまう可能性があります。あの人形によって、原爆の被害があの程度だったと伝わってしまうのは避けなければなりません。一部のメディアで、被爆人形の撤去によって原爆体験が風化するのではという報道がなされましたが、むしろ誤解による風化を進めさせないために人形を撤去するのです。」

**最後に、戦争や戦後を知らない若い世代の来館者にメッセージをお願いします。**

「来館者には、想像力を働かせることを期待しています。ケロイドや全身焼け焦げた被爆者の写真はもちろん展示していますが、溶けた瓦を見てどれだけ熱線が降り注いだのかを想像し、何の外傷もない被爆者が原爆症によって血を吐きながら死んでいく記録を見ることで核兵器の恐ろしさを想像してほしいのです。それが想像できるようにすれば、世界で起こっている悲惨な出来事にも関心を持つようになると思います。世界での惨劇にも、目を向け、想像し、共感して欲しいのです。丸山真男の言う『他者感覚』を養い、人の痛みを分かる人間に成長して欲しいと願っています。そして、そんな人が少しずつでも増えていくことが、遠回りなようで平和への一番の近道なのだと私は思っています。」

### 〈所感〉

敗戦国の歴史博物館は、人々に戦争の悲惨さを伝える。それは、戦勝国の歴史博物館には果たせない役割である。館長のお話を伺い、広島に生まれた者として、そして、戦争に負けた国に育った者として、核兵器と戦争を根絶するために何かをしていきたいと強く感じた。

(文責 小笠原玄騎)

<sup>1</sup> 一九五五年に広島市が設置。

<sup>2</sup> 平和記念資料館は、東館では第二次世界大戦前後の広島歴史を紹介し、本館で被爆資料の展示を行っている。

<sup>3</sup> 世界的な口コミ観光情報サイト。

<sup>4</sup> アメリカは、戦争を早期終結させるための手段として、複数の選択肢のうちから原爆投下を選んだ。投下目標として、直径3マイル以上の市街地を持ち、かつ、爆風で効果的に損害を与えることができるなどの条件を満たす複数の都市を選定し、広島もそれに該当した。

<sup>5</sup> 多くは朝鮮人、他に中国人、日系アメリカ人、南方からの留学生などであった。

### 志賀賢治 しがけんじ

広島市出身。1952年生まれ。平和記念資料館館長。1978年広島市役所採用。市人事委員会事務局長などを歴任し、2013年広島市役所退職。2013年4月より現職。